

パゴダと軍事の国にあつて

田村 克己
民博民族社会研究部

遺跡めぐりは自転車

わたしが四〇年近くフィールドとしてきたビルマ（ミャンマー）に、はじめて足を踏み入れたのは一九七七年のことであつた。当時、鹿児島大学に勤めて間もないわたしは、ビルマ研究の先駆者である同大学の荻原弘明先生（東洋史）の導きと励ましもあつて、この未知の国の扉をたくことになつた。しかし、当時のビルマはネーウイン政権下の「ビルマ式社会主義」による一党独裁のもとにあり、潔癖なまでの非同盟中立政策をとつて、外国に対してはほほ国を閉ざしており、まさに知られざる国であつた。

三ヶ月の滞在中、荻原先生などから紹介されたビルマの人たちは、また本当にこの国の右も左もわからないわたしを親切にあちこちに連れて行き、また研究への道筋を示してくれた。そうしたなかで、ほほ同じぐらいの二〇代後半の友人たちとの交流は楽しかった。なかでも、ある若手のとががない。

取り壊されたパゴダ

ところで、写真家の彼のパゴダには後日譚がある。その後も彼の仏教実践の場としてあり続けているものと思つていたところ、何年か前にその地区の軍司令官が、そのパゴダを取り壊し、後に自分のためのパゴダを建てたという。パゴダなどの宗教施設は確かに誰の私有物でもないが、それにしても有無をいわせぬやり方で取り上げてしまう



1983年当時のバガン遺跡



僧侶に寄進される品々を吊るした「豊穡の木」（ミャンマー中部にて、1999年11月）



未明にパゴダの境内で祈る人びと（ヤンゴン、シュエダゴンパゴダ、2013年3月）



仏陀に供える灯を用意する若者など（ヤンゴン、シュエダゴンパゴダ、2013年3月）

写真家と一緒に、仏塔（パゴダ）や寺院の跡が無数といつてよいほどに残っているバガン（バガン）遺跡を自転車で回つたことは、格別な思い出として残っている。当時は、遺跡の城壁内の村が南の郊外にあらたに作られたニューバガンに移転する前で、人びとの生活が遺跡のなかに溶け込んでいた。夏季の始まりの三月の焼けつくような日差しのもとを、乾いた大地のなかで自転車に漕ぎ疲れ、倒れ込むように遺跡にたどり着いてほつとしたことを思い出す。そこにヤギの群れとそれを追う少年がやはり憩つていたことが、今も鮮やかに脳裏に浮かんでくる。その彼とはその後も折に触れて会つたが、二年ほど前に彼からもこのことを懐かしく語られたときには本当にうれしかった。

来世への願い

彼については忘れられないことがもうひとつある。二〇年前ほど前、彼は外国での写真コンテストは、驚かされるとともに、暗澹たる思いにとらわれたものであつた。

例えば、わたしが初めて足を踏み入れてから今に至るまでの長いあいだにわたり、一九八八年の民主化運動のほんの一時を除いて、ビルマ（ミャンマー）はほほ軍主導の政権下にあつた。そして、民主化に向けて進んでいるというものの、今も軍は相変わらず大きな力をもつ存在であり続けている。軍は英国植民地下の独立運動以来、この国の根幹を担つてきており、その力によってある程

ストに入賞し、いくばくかの賞金をもらうことになつた。当時のビルマとしてはかなりの高額にあたるので、わたしも大いに喜び、何に使うのか、家を新しく建てるのかなどと尋ねてみた。しかし彼が言うには、自宅近くの崩れかけたパゴダを修復して、そこで毎日数珠を繰ることをしたいとの話であつた。わたし自身思いもつかないことで、心のなかで彼に、そしてビルマの人にはかなわなうと思つたことであつた。

ビルマの人たちは自らの来世を願つて仏教の実践に励み、お布施を本当に熱心におこなっている。最初に行つた当時、人びとが貧しいなかでお寺の修復などを熱心におこなっているのを見て、若い別の友人に、少しはそうしたお金やエネルギーを経済的な方面に向けてはどうかと言つたことがある。そのとき彼は言下にそうした考え方は唯物主義的（マテリアリストイック）であると答えた。ともかくこうした宗教心の篤さは現在まで変わるこ

度の秩序や治安が保たれてきたともいえるかもしれない。しかし、先に述べた強権的な手法、その体制を維持するために発達した監視や秘密保護のしくみなど、こうしたものに出会うたびに重い気分させられてきたことも確かである。先述のパゴダの運命を語つたときの彼は、憤りや悲しみなどの感情を顕わにすることもなく、諦めというには安易すぎるほどの恬淡とした表情であつた。それは今もなお、わたしのまぶたに焼きついて離れない。